

# 夜あけのさよなら 魚は水に 女は家に

田辺聖子



田辺 聖子 長 篇 全 集

---

夜あけのさよなら  
魚は水に 女は家に

田辺聖子



文藝春秋

田辺聖子長篇全集

12

夜あけのさよなら  
魚は水に 女は家に

一九八二年八月一日 第一刷

定価

一八〇〇円

著者

田辺聖子

発行者

杉村友一

発行所

株式会社

文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三一二三

電話 (〇三) 二六五一一二二一

印刷所

凸版印刷

製本所

矢嶋製本

製函所

加藤製函

万一、落丁乱丁の場合は

お取替え致します

田辺聖子長篇全集第十二巻／目次

夜あけのさよなら

5

魚は水に 女は家に

131

解説 三國一朗

353

A 装帧  
D 滩本唯人  
坂田政则

田辺聖子長篇全集第十二卷



夜あけのさよなら



1

目がさめたときは、まだ夜あけだった。

悪魔には悪魔のかなしみがあるように、夜明けには夜明けの影がある。

夜明け——って、希望的な、たのしいものばかりじゃないんだ。「夜明けの歌」はうそ。

この、夜明けに半醒はんせいになつてるのが、いちばんいけない。うつら、うつら、というやつ。

夜あけというのは、ふつう、いわれるように明るさの前提ではなくて、暗さの最後のあがきなのであって、わたしはいつもこの時間に自殺したくなっちゃうのである。

ちっとも、いいこと考えない。——今日は僕わがとデートの日だけれど、それだつて考えるとうれしくはなく、気の滅め入る材料になるだけである。気が重くつて、ゆううつで、重荷になるのだ。僕はわたしなんか、愛してないのである。知つてゐるのだ。

わたしが強引だから押し切られてるだけである。いつだって、イヤイヤあう。そんな所が感じられる。ちゃんと知ってるんだ。わかつてる。わかつてるけど、やめられない。このつらさ。

彼は大学生である。——「大学生 おほかた貧し 雁かり帰る」というのは草田男くさたおの句だったかしら？ 僕は貧しい大学生である。そうして、いつも水のように薄情で、そのくせ気がやさしいから、わたしがクライだとも、はつきり言えないのである。

自分からはすんで会ってくれないけれども、誘えばイヤだともいわない。どうなのか、そこんこがじれつたい。それで、わたしはゆううつになる。

こんな時間にそれを考えていると、どうしようもなく悪い方へ考えが傾く。死にたくなつて——、そのくせ、ではやめますか、というと、イエイエ、とんでもない、そりゃア、会いにゆく。ひと月にいっぺんだもの、けれどもその気持の中には弾み、というものがない。

あんまりうれしすぎて、期待の大きさに却かえつて自分自身おしつぶされ、心が重くなる、というようなものかもしれない。

それから、夜あけの重くるしさの中には、なにか、人間を本質的なものへ目を向けさせる、マジメなものがあるからかもしれない。わたしはこんなことで生きていいの

か、こんな人間で、神サマ、許されるのでしょうか、という……。

あんまり考えてると、あたま禿<sup>は</sup>げるし、めんどくさくなつたんで、わたしはねどこから起き出して服を着た。今日はちよつといい服、オレンジ色のドレスで、袖がふんわりして、袴<sup>かち</sup>がちよつと開きすぎくらいのを着てゆくことにする。今夜のために。(氣が進まないけど)

それでも、いつものように、妹のクミ子と洗面所で先を争ったり、あわただし朝食をすませ、何かしら母の叱言<sup>こい</sup>をきいたり、バスストップへ走ったりするあいだに、しだいにいつもの調子がでてきた。

やっと世間がバラ色にみえてきたんだ。いい上天氣の冬の朝で、どの家の窓ガラスも霜がとけたようにキラキラしていた。人々は威勢よく電車につめこんでいたし、電車は次々とやってきた。それはもりもりと元氣の出るような、朝のラッシュの光景であった。やっぱり、こうこなくっちゃ。人間、あんまり本心に立ちかえてマジメになると、非常にやりにくい。適当にスイッチを切ったり入れたりすることも大切な。適当に氣楽にしよう。

会社は心齋橋<sup>しんさいばし</sup>よりの、本町<sup>ほんまち</sup>のビルである。

四階の庶務課が、わたしの職場である。万博からこっち地下鉄が千里ニュータウンへはいつてきたので、たいへん早くなって、便利である。千里ニュータウンのわたしの家

から、四十分ぐらいで会社へ来られるようになった。

似たような短大を出ておんなじときに入社した同僚のミイ子こと、金谷美知子はもう来ていた。

二人で湯沸し室でしばしおしゃべり、美知子は一万円の本ダントを買うんだといっている。もう半年、いつづけるのである。こんどの給料もらったら、絶対、買うという。でもこの間の暮のボーナスにも、彼女はとうとう、買わなかった。

「あれはやね、コートを買うほうが緊急やったからですよ」と、いつも何か、理屈がつく。その本ダントは銀の手細工であって、べつに宝石入りでも何でもないが、独特のもので、世界に二つとない、へんてこな、すばらしいものだそうだ。

「ねえ、今日、それ見にかへん？ 帰りに……心齋橋筋ちよつと入ったトコよ」

美知子がいったが、わたしは、

「ダメよ、今日は……」

といううちに、顔がニヤニヤとほころびてきた。美知子はわたしをどやしつけた。

「ワー、いやらしやつ。思い出し笑いなんかして」

夕方になると、本当に嬉しさがたかまった。

国鉄を使って京都へいく。私鉄より、国鉄の駅へおりた方が、まるで遠い国から優にあうために、はるばる旅をし

てきたようで、改まった気持になるから、好きなのである。

「きょうとー、きょうとー」という構内アナウンスも好き。

優の姿は改札口にみえなかった。

わたしは彼のために、いそいで煙草を買い、また、あわただしい足取りで改札口のほうへ引返す途中、人波をかきわけるようにして、優の走ってくるのにつかつた。

「何や、改札口やいうさかい、中央で待ってたのに……」  
彼はちょっと怒っていた。

優は今日は新しいスーツに、きいろいボロシャツを着ていた。あかるい紺のスーツは、わたしの見たことのないものだった。お兄さんの借りてきたのかしらん。手に本を一冊持っているだけ。いつみても本を持っている。

「早ういこ。スピーカアで呼び出してんで。僕、三十分、もう待った」

と唇をとがらせていた。タクシーのそばへいきながら、  
「僕、今日はゆっくり出来へんねん」

というので、わたしはだまっていたけど、内心がっかりした。

「兄貴が入院しよってなあ。親爺とお袋は店のほうへいつてるし……いよいよ、もう、僕とこの店、あかんらしいわつぶれるよ」

ほんとにゆううつな話だった。

だんだん、町のそとに灯はきらめきはじめていた。タク

シーはその中を突切った。

「つぶれるって……マアちゃんのおうちの商売が破産するってわけ？」

「破産、いうほどでもないけどな。——しかしそうなると、僕も自分で自分のことせんらんし……」

「どうにかなるわよ」

「どうにかって、そんなのききなもんちがうよ。こないしても、ほんとに僕は、気が気やないねんで。君なんかとちがう」

「知らんやないの、わたしにハツ当りしたかて……」

わたしは優のひざを押しやるしぐさをして、

「あんまり、そばへ寄らんといてちょうだい……ユーウツが伝染るさかい」

「伝染したる」

優はいやそうな顔をして、タクシーの窓の外をみていた。京都で泊ろう、といつか優はいったことがあったので、わたしはともうれしかったんだけど、優ときたら、人の氣持に水をぶっかけるのが趣味みたいである。

優がちょっと大学で用がある、というので、タクシーを大学の手前でとめた。

京都は学生の町である。これだけたくさんのお学生さんを、大阪では見ることができない。

そうして、町の人々は、学生にいかにも親切である。そ

れは伝統的なもので、そんな感じも、大阪育ちのわたしにはめずらしい。

優はさっきと、タクシーを下りて大学の正門を入れてゆく。わたしはタクシー代を払った。

わたしは大阪で誰かにあったりするとまずいので、優とのデートのときは、いつも彼の下宿のある京都までくるのだった。大阪より木々の緑が濃く、お寺や神社の多いこの町の古い雰囲気は、わたしの恋心を美しく染めてくれる気がする。わたしは見なれない、ちまちました、手工芸的な美しいこの町で、優にあうのが、いちばん好きなのだった。

優は玄関ホールへ入って、その掲示板から何かを手帖にうつした。わたしは芝生と赤レンガの道を歩きまわり、皮の半コートのポケットに手をつっこんで、建物に貼られたピラを読みながら待っていた。こども、いつかバリスタがあったのである。大学創設者の銅像は全身、くまなくピラで掩われていた。

「いこ」

と優は出て来た。

男くさい、殺風景な校舎を背に、優はたいへん美しく見えた。ほかにもうろうろしている学生はいっぱいたけど、ロクな男はいなかった。みんな卑しげな、心変わりやすそうな、あるいは馬鈴薯をつぶしたような男にみえた。

そこから近くの店へ行って、腹ごしらえをしようと優は

歩き出した。優のゆううつそうな、やさしい、心配ごとの多そうな、何か弱味をかくしているような表情は、ことさらにわたしには好ましいものであった。

優はズボンのポケットを探っている。わたしはさっき買った煙草を、すかさず出した。当然のように優はそれを取りあげて、一本抜きながら、話はいいかわらず、ゆううつなことだ、

「家もなくなるんや。抵当でとられて」

「ふーん。でもマアちゃんさがさ、一人でうろうろして動きまわったってしょうないでしょ」

「うん。けど、あっちをたたんで、こっちへくるっていうから、借家をさがしてるねんけど、オドロキ、たかいねえ、敷金なんて無茶にたかい……」

優はつまらなさそうに煙を吐いた。

「そやさかい、武士の商法はやめとけ、いうてんけどなア」

優の父親は会社を停年で退職してから、滋賀県の田舎町で文房具店をひらいたが、三年ほどで失敗したのだそうである。

「早うつぶせ、つぶせ、いうてんのに……借金こしらえてつぶすなんて」

優は気を腐らせることが多いので、浮かぬ顔をしている。すこし顔色は悪いが、すべすべした、綺麗な頬で、うつむ

くとしつとりした情趣が目の下からあごへかけて刷<sup>ス</sup>かれるようだ。屈托<sup>クツカ</sup>した顔ながら、わたしはそこがよいと思って好きでたまらない。

優はタクシーをまたとめて、四条河原町まで、といった。学生たちがよくいく店で、わたしも優につれられて、二度来たことがある。ちょっと想像できないような、やかましい、騒がしい店だった。「赤ふん」という店である。土間はもう一杯だったので、小さい間へ上って、日本酒と串カツを優は注文した。

「おい、北村……何じゃ、お前」

なんて、優の肩をどやしていく学生があった。何かの会合があったのを忘れていたらしい。ちょっと、というように優はわたしに手をふって二階へ上っていった。わたしはテーブルに肘をついて待っていた。

となりの席は、男一人が飲んでいた。彼はちらちら、こっちを見た。二十五、六ぐらいのサラリーマンふうの男だった。三回目ぐらいに視線があったら、ニタツと笑って、あつかましいこと、おびただしい。

優が二階から降りてきたが、青ざめて「しんどそう」だった。

女の子が注文したお酒をはこんできた。ブリブリふくれたような、ぶあいそな女の子だ。

「きたないぞ。ちゃんと拭け！」

優は食卓の上を指さして女の子にいった。女の子は汚れた膳<sup>テ</sup>ぶきんでのろろ拭き、優をにらみつけて、品物をおくと、向うへ尻をふりたてていった。わたしはお酒をついで、

「オオ怖<sup>こわ</sup>……。マアちゃん、ごきげんわるいのねえ……」  
「かんにん。僕、今日はどうにも気が重うてやりきれへん……」

「まあ、お飲みよ。飲んだら、忘れるよ」

優は若いくせに日本酒が好きである。

「いや、早く帰る。今日は腰をおちつけてられへん……」  
そう言いながら、優は腰をあげるようすもないのであった。わたしは飲んだときの「マアちゃん」のほうが、やさしいから好きだ。

女の子がまた、来た。串カツの皿を持って。

「爪はきれいかな？」

と、優はまた、つかかるように女の子にいった。女の子は返事もなかった。投げ出すように置いていった。彼女はみんなから、サツちゃんと呼ばれていた。小太りの陰気な顔をした十七、八の子で、髪は白いきれで包んでいた。優はまだ、「タマには風呂へ入れよ」なんて、いつている。それでやっとわたしにも、それが彼の親愛の表現だとわかったのだった。サツちゃんにワルクチをいうときだけ、優はやけくそみたいに、元気のいい声を出していた。

わたしはその日、オレンジ色の服を着ていたのは前にいったとおり。でも優はいつこうに、似合うとも可愛いともへちまともいってくれないのだ。オレンジ色の服は、わたしの白い肌とちょっと栗色がかった髪によく合う、ってみんないうのに。

自分のことをほめてくれない男の前に坐ってるのは、間がぬけて落ちつきわるいもんだ。

そのくせ優は、顔見知りのだれかれに、ちょっと挨拶している。あんな奴ら、どうだっていいではないか。こっちはせっかく大阪から出て来たっていうのに。

どうもわたしと優の関係は、わたしが緊張っているから保っているものの、もしわたしが手を引いたら、さらさらと水に流されて、あとかたもなくなってしまう気がする。

それは自分ではみとめたくないけど、ため息の出そうな辛い、さびしい感じである。ほかの男の子、たとえばウチの課の独身の青年、貝原宏や、笠井くんや、清瀬くん、などといった男の子の前だと、わたしはいつものびのびとモノがイえるのに、ふしぎや、優に向ったときだけ、ヘナヘナと心がくじけてしまう。

だんだんに語尾がすすんで、自信のない、ひるんだ心持になってゆく。

では優が、こわい男の子かというところ、そうではなく、わたしと同じどしのおとなしい、哀れっぽい、会えば泣きごとをならべて陰気くさい、しかもわたしの金を使って酒を飲むことばかり考えてる、冴えない大学生なのだ。もつとも綺麗な顔をしているけれども、それだって、いつもゆううつそうにしているせいか、バツと目立つ美しさではない。しかし、そういう男の子である優が、わたしにはこわいのである。彼の顔色を見たり、気がねしたり、彼といっしょに破産した家のことが心配になったり……。彼のきげんがいいとわたしも嬉しくなり、きげんがわるいとこっちもげんなりしてしまう、どんなことでもしてやりたいような、見すてられないような、(チェッ、男のくせにウジウジすんな!)と舌打ちしながらでも、何シか、彼のために力になつてやりたいような、元気づけたいような……。そういう、モロモロの、複雑な心境がいつべんに押しよせてきて、わたしは優の前でだと、いつもみたいに、

「ワハハハ」

と笑ったり、口ぐせの、

「あほ」

「ばか」

などが口軽に出てこないのだ。

こういうの、精神衛生にわるいな、とつくづく思う。こっちが惚れてしまっちゃ、美しくなるところか、だんだ

ん、ぶさいくになり、モタモタし、陰々滅々、たすからない。

「マアちゃん、出ない？」

わたしは皮コートをとって、勢いよくたちあがった。優ときたら、ほっといたら朝まで飲んでるから。

わたしは勘定を払った。さっきの、サッチャンという給仕の女の子が伝票をもってきた。

「オイ、水虫は癒ったか？」

なんて、まだ優は、その子をかからかっている。

その子はいいかわらずにらむような眼で優を一べつして、ひとこともいわず、口をとがらしたまま、わたしに釣銭をわたした。ちょっと珍しいほど、ぶあいそうな、子である。『ありがとうございました』

と店の奥から言ったのも、ほかの女の子や、おかみさんや、板前のおやじさんだった。

四条河原町へ向って歩きながら、わたしは、

「かわってんのね、あの子」といった。

「だれ。サッチャンか？」

優はすぐ、いった。

「施設そだちなんだって。赤ん坊のとき、ゴミ箱のフタの上に捨てられてたんやて」

「わア、ユニークな経歴やね」

「荒涼たるもんやで。ゴミ箱なんて」

「ゴミの沙漠か」

「バカ」

優とあるく河原町の雑踏と灯の海はわたしには楽しかった。

木屋町へ折れて、高瀬川のそばをずっと歩いた。ここは料理屋や、スタンド割烹というような、小粋な、小店も多くて、表通りのけばけばしさがなく、幅の狭いエレガントな高瀬川の川ぞいに柳が植わっている。ほの暗い道で、つめたい夜風に吹かれながらゆくこの通りは、おちついていて、わたしは好きだった。

お酒がはいった優は、親しみやすくてやさしくてよかった。

さっきの、ゆううつが、少しは吹きとんだらしくて明るい顔をしているのもよかった。

「あ、もうこんな時間ね」

とわたし時計をみていったら、いつもはもうおそいよ、とふんべつくさくという優なのに、にやっとして、

「まだ早い」

なんて、きれいな、ながし眼でいう。

「うん、でも京都はねえ、やっぱし遠い気がすんの、大阪ほどおちついて遊んでられへんわ、時間が気になって――」

「泊ればいいじゃん、レイ子」

「あほ」

とわたしは優の腕をつねった。

もう一年ほど、こんなことばかり、いつて遊んでいる。会えば食べたり飲んだりして、水のようにはなくなく、あわあわしく別れてゆく。泊れよ、と彼がいわないときは、わたしが泊ろうか、という。二人で、火のついたボールを投げあうみたいに、そんなことをいつて楽しんでるだけだ。といって、二人とも、ウソやお世辞でいつてるんじゃない、まったく根拠がないのじゃない。でも、そうかといって、ちよっと本気に片方がなると、片方がヤケドしたみたいに、ぱっととびのく。両方、ええい！ ヤケドするんなら、全身大ヤケドしちゃえ！ という気にならない。なってるのかもしれないが、双方、タイミングがあわないと、スカタンになる。

わたしはつくづく思う。

「ある愛の詩」なんて映画、あったけど、ウソやわねえ——あれ。

両方、大ヤケド覚悟で、両方からバツととびついて燃え出すなんてこと、現実ではあんまり、ないよ。

片っ方が燃え出すと、片っ方が水かける。

片っ方が素手で火をつかんでもかまわない、と決心してるのに、片っ方がそれをふんべつくさく、たしなめたりす

る。あるいは、先に言い出したら、言い出しべエになって諸事、決着つけたり責任とったりせねばならぬ、というチエが働く。で、やめる——双方、間がわるくてれくさく、（ヤアヤア、どうも……じゃ、また）なんて、手をあげてサヨナラして、一巻のおわり。

どうもそういう男と女の間がらが、現代では多いようであるよ。それが現代の「ある愛の詩」だ。

わたしと優は、町の小さなコーラスグループで知りあったのだ。会社のちかくに、小さい幼稚園があつて、近くのひとで歌うことの好きな仲間が、夕方集まってコーラスをしていた。貼紙をみて、わたしも加えてもらった。

優はそのころ、幼稚園のとなりの会社にアルバイトで働きに来ていて、たまにのぞいていたが、やがてその幼稚園は閉鎖したので、コーラスグループも解散した。

大阪の町なかには、みんなビル街になって、住民が市外の地域へ追われてしまい、幼稚園へはいるような、小っちゃな子供は住まなくなつてしまつたのだつた。

桃色に塗つた小さな可愛い椅子、「おゆうぎしつ」のバラの壁紙、熊サンがラッパを吹いてる絵のかかれた黒板、いまでもわたしはおぼえている。そこで、わたしたちは「スワニー・リバー」や「花」や「青きドナウ」のコーラスをした。数カ月だつたけど、近くの会社勤めるサラリーマンや女の子がいろいろ来ていて、とてもたのしかった。